2025/2/2

ルカの福音書　講解メッセージ㊷

『ルカの福音書 18 章 1-14 節　取税人の祈り』

■神は祈りにこたえられる

> 「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町にひとりのやもめがいて、裁判官のところに来ては「私の相手をさばいて、私を守ってください」と訴えていた。裁判官はしばらく取り合わなかったが、後には心の中でこう言った。「私は神を恐れず、人を人とも思わないが、このやもめはあまりにもしつこい。裁判をしてやらないと、ひっきりなしにやって来て、うるさくてしかたがない。」主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神が、夜昼呼び求めている選民のためにさばきをつけず、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言います。神はすみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」（ルカ 18:1-8）

イエス様が「いつでも祈るべき」と教えておられるのは、祈りには希望があるからです。不正な裁判官は初め、やもめの訴えを無視しましたが、やもめはあきらめずに訴え続けました。神も、あなたが本気で求めているかどうか、あきらめずに祈り続けるかどうかを見ておられます。あなたが本気であれば、神も本気になって答えてくださいます。不正な裁判官ですら、本気で求める者には向き合うのですから、神が向き合ってくださらないはずはありません。あなたは、本気で求めているでしょうか。

神は求める者に「正しいさばき」をなさいます。重要なのは、神があなたの願いどおりにすると約束しているわけではないという点です。あなたの願いが本当にあなたにとって益となるかどうかを、神が判断してくださるのです。祈っても、自分の思い描いたストーリーどおりにならないことがあります。それは、神があなたにとって最善の答えを備えておられるからです。ですから、すべてのことを感謝して受け取ることが大切です。これが神への信頼です。

神が正しいとされるさばきの基準は、「どうしたら、あなたがもっと神を愛せるよ

うになるか」です。いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。神はあなたに永遠に残る財産を蓄えさせたいと願っておられます。祈ったことと違うことが起きても、つぶやかずに感謝して受け取るなら、あなたはますます神を愛せるようになっている自分に気づくでしょう。神は私たちの考えよりもはるかに優れた計画を持っておられます。

神をもっと愛せるようになるとは、神との距離が縮まることです。イエス様は、それは神と一つになることだと言われました。愛とは、ほしいものを与えることではなく、一つになろうとすることです。神の関心はここにあります。

■人は神を求めるように造られている

人間が感じたり考えたりできるのは、神のいのちが与えられているからです。何かを認識するためには、それを判断するための絶対的な物差しが必要なわけですが、その物差しこそ神のいのちです。また、思考が生まれるためには目的が必要です。私たちに思考があるということは、私たちが目的に向かって動かされているということです。その目的地は、絶対的な物差しで示される神です。神が私たちを引き寄せておられるのです。

詩篇には「わが魂は神を慕い求める」とあります。私たちの魂は、神と結びつき、神と一つになることを求めています。これが「神を愛する」「信じる」ということです。人は生まれながらに神と一つになることを求めていますが、誰もそれに気づけません。悪魔の仕業で死が入り込み、神が見えなくなったからです。

しかし、意識の上では何を目指しているのかわからなくても、私たちのうちにある神のいのちが神に向かって私たちを動かしています。その結果、人間は、見えない神を見えるものに思い描きます。それは、一人一人の中に「理想」として思い描かれ、神を求める思いは、理想を求める思いになりました。人が、理想に向かって生きているのは、自分では気づかないけれど、魂が神を求めているからなのです。見たことのない神を思い描くことができるのは、神が私たちを呼んでおられるからです。

理想を求めることは悪いことではありません。理想に向かう中で困難にぶつかると祈ることができるからです。祈った結果が願いと違っても、実は私たちが本当に求めていたのは祈りの結果ではなく神ご自身です。祈って神に近づいたという事実こそが祈りの答えなのです。あきらめず祈り続けることで、あなたは神に近づいています。これこそが、私たちが気づかないうちに求めていたことなのです。

私たちが祈りによって何を求めても、本当に求めているのは神です。神が与える最

終的な祈りの答えとは、「自分が本当に求めていたのは神だった」と気づくことです。これが神の正しいさばきです。イエス様が求めておられるのは、祈り続ける信仰です。困難を通して、自分が求めていたのは神だったと気づき、神と一つになるとき、人は真の幸せを味わうことができます。

神が与える幸せは、この世が与える幸せではありません。困難の先にある幸せです。この世の宗教は「あなたの理想をかなえよう」と言いますが、それは一時の幸せであって、本当の幸せではありません。聖書が教える真の幸せは、神と出会い、神としっかり結びつくことです。

■神は「何もできない者」を愛される

> 「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対して、イエスはこのようなたとえを話された。」（ルカ 18:9）

自分を義とし、人を見下すとは、「I am OK. You are not OK.」という関係です。実は、世の中の関係はほとんどこれです。相手をさばくことで「I am OK.」としようとするのです。

それは、自分には価値がないと思い込み、不安だからです。人間の行動は、自分が思っていることの逆を行います。自分は価値がないと思うからこそ、自分の価値を引き上げようとして「I am OK.」という立場を取るのです。アダムとエバ以来、人は自分をよく見せようとして生きています。成功した人は称賛され、それを見て「どうせ私はだめなんでしょ」と言う人もいます。それもまた自分を OK とする方法です。こうして人間関係を築きながら私たちは生きています。

それは、悪魔の仕業で死が入り込み、神が見えなくなったからです。神が見えなくなったために、自分の本当の姿も価値も見えなくなりました。だから、自分で自分の価値を手にしようとするしかなかったのです。こうして人は皆、自分を正しいとし、相手を見下すという生き方をしています。しかし、私たちの真実の姿は、神に支えられている自分です。無条件で愛されている自分です。私たちは神の一部であり、神の価値を所有しています。もし、それが見えれば安心できるのですが、人は神と切断された状態なので、自分の価値が分からず、不安なのです。

では、なぜ神は私たちを無条件で愛するのでしょうか。それは、私たちの真実の姿が「何もできない者」だからです。

■弱さにこそ神の恵みが働く

人は神が見えなくなってから、自分を知る方法として、人との比較しかできなくなりました。人よりできることを誇り、できない相手を見下すことで価値を得ようとします。しかし、それは真実の姿ではありません。真実の姿とは、神という絶対的な物差しを通して見た自分です。

> 「ふたりの人が祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人、もうひとりは取税人であった。 パリサイ人は立って心の中で祈った。『神よ、私は他の人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを感謝します。 私は週に二度断食し、受けるものはすべて十分の一をささげています。』」（ルカ 18:10-12）

このパリサイ人の行いは立派です。しかし、それは人と比べるから立派なのです。神と比べれば、取るに足りません。神にとって私たちは虫けらほどの存在です。虫同士が誇り合っても何になるのでしょうか。

私たちの能力は有限で、日々衰え、必ず消えます。神は永遠で変わりませんが、私たちは変化します。つまり、私たちは何かできているように見えても、本質的には「できない者」なのです。これが真実の姿です。私たちは無から造られ、神の息によって生きる者となりました。私たちは無であり、今あるのは神のおかげです。自分が何かできると思うと神が見えませんが、何もできないと知ると神が見えてきます。

パウロは「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」と言いました。これが真実の姿です。神の前では私たちは無です。そして、何もできないからこそ、神は私たちを愛するのです。親が何もできない赤ちゃんを愛し助けるように、神はあなたを支えます。何かできるから愛するのではありません。

しかし、赤ちゃんが成長し自分でできるようになると、親の干渉を嫌がるようになります。同じように、私たちは自分が何かできると錯覚すると、神を信じようとしなくなります。神を信じていても、自分はできると思っていると助けを求めません。

■本当の自分を知ると希望が生まれる

神は、あなたが「自分は何もできない」と気づくのを待っておられます。自分の本当の姿に気づけば、神の恵みがわかるようになります。弱さにこそ神の恵みが強く働くからです。何もできないと知ったとき、「助けてほしい」と叫ぶこと、それが私たちにできることです。イエス様はその姿を次のように教えられました。

「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、胸をたたいて言った。『神さま、こんな罪人の私をあわれんでください。』 あなたがたに言います。この人が義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカ 18:13-14）

取税人は神のことばに従おうとしましたが、できませんでした。しかし、何もできなくても叫ぶことはできました。これこそ神が待っていた姿です。

「義と認められる」とは「神の助けを受け取る」ということです。助けられるのは、自分を低くする者です。逆に、自分を高くする者には、神は弱さに気づかせようとされます。だから神は患難を静観されるのです。問題にぶつかってもすぐ答えが来ないのは、自分には何もできないと悟るためです。これに気づき、へりくだって神の助けを求めると、神の恵みが働きます。これを本当に知ると、見える問題は問題ではなくなります。患難の先に希望が見えてきます。

この世界で問題から逃れることはできません。苦しみに出会います。しかし、その中でも希望を持てるのは、本当の自分を知り、神に助けられている自分を知ることができるからです。これが安息を得るということです。これこそ神が与えたいと願っておられる真の救いであり、癒しです。

大切なのは、本当の自分の姿を知ることです。本当の姿とは、神によって支えられている姿です。私たちは神の前では無力です。だから神はあなたを愛しておられます。自分が何もできないと知っている者は幸いです。この地上で小さな者、能力の及ばない者、とるに足りないと思われている者は幸いです。逆に、人より優れ、ちやほやされている人はかわいそうです。

あなたは、自分は何かできると思ったとき安心していないでしょうか。それは、人と比べて価値を知ろうとする生き方です。しかし、私たちは人の前で生きているのではなく、神の前で生きています。神の前にはあなただけであり、あなたの前には神だけです。

自分の本当の姿を知り、神に助けを求めて生きましょう。重荷を神の前に持っていき、弱さのうちに働く神の恵みを知るなら、そこに希望があります。どんな困難にぶつかっても希望があるというのは本当です。祈って本当の姿に気づくなら、神は正しいさばきをしておられ、自分は神によって生かされていると知ることができるようになります。